

特異点の higher conductor module について *)

京大・数理解 沼 昌孝 (Masataka TOMARI)

複素数体 \mathbb{C} 上の 2 次元正規特異点 (V, p) とその特異点解消 $\psi: (\tilde{V}, A) \rightarrow (V, p)$ を使って定まる $\mathcal{O}_{V, p}$ -module $R'_{\#} \mathcal{O}_{\tilde{V}}$ を考えよう。このノートでは、 $R'_{\#} \mathcal{O}_{\tilde{V}}$ の m -adic filtration (m は $\mathcal{O}_{V, p}$ の極大イデアル) と特異点の numerical invariants との関係について論ずる。まず、一般次元にも通じる話をして、1 次元特異点について述べる。そして、2 次元特異点独特の話をしたい。

筆者にとって、この研究の出発点は、命題 (2.5) であった。2 次元正規 Gorenstein 特異点について、特異点の幾何種数 p_g と算術種数 p_a にはある制限が存在する事は、以前より経験的に知られており、また、種数が小さい時には、いくつか命題が知られていた (用語については §2 を見よ)。それを、 $R'_{\#} \mathcal{O}_{\tilde{V}}$ の m -adic filtration を考えることにより、具体的な命題として明らかにすることができた。だが、この研究対象が、特異点論に決定的な命題を与えてくれるかどうかは、
*) このノトは、[11] Part I と密接な関係があります。

まだまだこれからの問題である。

2次元正規特異点についての基礎的な事柄についての詳細などは, [4], [12], [10], [11] 等を参照して下さい。

§1. 単項化定理, 一次元特異点について

(1.1) (V, p) を n 次元被約特異点とする時, 次の data を (V, p) の partial resolution と呼びます: $\psi: (\tilde{V}, A) \rightarrow (V, p)$, ただし $\psi: \tilde{V} \rightarrow V$ は 固有正則双有理写像で, \tilde{V} は (局所) 正規であり, そして 解析集合 $|\psi^{-1}(p)|$ を A と書くことにします。(一次元の時, これは正規化であり, 勿論本当の resolution です。) 我々は, ideal $J \subset \mathcal{O}_V$ に対して, 元 $f \in J_p$ であって $J \cdot R^{n-1/2} \mathcal{O}_{\tilde{V}} = f \cdot R^{n-1/2} \mathcal{O}_{\tilde{V}}$ となるものが存在することを示します。その為の準備を以下このパラグラフで述べましょう。

ψ の critical locus を E と書く。すると, $\dim E \leq n-1$ であるから, 集合 $\{q \in V \mid \dim |\psi^{-1}(q)| \geq n-1\}$ は離散的であり, 以下 $\{p\}$ であると仮定する。 $R^{n-1/2} \mathcal{O}_{\tilde{V}}$ の support は $\{p\}$ に含まれる。 $R^{n-1/2} \mathcal{O}_{\tilde{V}}$ を higher conductor module と呼びます ($n \geq 2$)。

さて, A を $A = \left(\bigcup_{j=1}^m A_j \right) \cup A'$; A_j は (大

域的) 既約成分で $\text{codim } 1$ のもの, $\text{ord } A' \geq 2$, というふうに分解します。ideal $I \subseteq \mathcal{O}_V$ に対して 記号 $D(I, \psi)$ を次のように定める。

$$D(I, \psi) := \sum_{j=1}^m \left[\inf_{f \in I_p} v_{A_j}(\psi f) \right] \cdot A_j,$$

ただし, v_{A_j} は ψf が恒等的に消える \tilde{V} の連結成分に属する A_j に対しては $v_{A_j}(\psi f) = +\infty$ と定め, 他の場合は, A_j の generic point に於ける ψf の vanishing order であるとする。

各 A_j に対して, 元 $f_j \in I_p$ であって, 条件

$$v_{A_j}(\psi f) = \inf_{f \in I_p} v_{A_j}(\psi f) \quad (\star)_j$$

を満たすものをとります。その一次結合 $f_{\alpha} = \sum_{j=1}^m a_j f_j$,

$\alpha = (a_j) \in \mathbb{C}^m$, が, generic な α に対して, すべての j について条件 $(\star)_j$ を満たすことは, 容易に確かめることができます。上で導入した記号を使うと, $D(I, \psi) = D(f_{\alpha}, \psi)$ for generic $\alpha \in \mathbb{C}^m$ ということです。

記号 $D(I, \psi)$ に対して \mathcal{O}_V -ideal sheaf $\mathcal{L}_{D(I, \psi)}$ を,

$$\mathcal{L}_{D(I, \psi)} = \begin{cases} 0; & v_{A_j}(\psi f) = +\infty \quad \forall f \in I_p, \text{ とする } A_j \text{ が存在する } \tilde{V} \text{ の連結成分上,} \\ \mathcal{O}_V(-D(I, \psi)), & \text{上記以外の } \tilde{V} \text{ 上.} \end{cases}$$

と定めて, $\mathcal{O}_{D(I, \psi)} := \mathcal{O}_V / \mathcal{L}_{D(I, \psi)}$ と書くことにします。

定理 (1.2) (単項化定理)

(V, p) を n 次元被約特異

点, $\psi: (\tilde{V}, A) \rightarrow (V, p)$ を partial resolution, $\mathcal{I} \subset \mathcal{O}_V$ を ideal sheaf, として元 $f \in \mathcal{I}_p$ が $D(\mathcal{I}, \psi) = D(f, \psi)$ を満たすものとする。すると, 次の関係が成立する。

(1) $\mathcal{I} \cdot R^{n-1}\psi_* \mathcal{O}_{\tilde{V}} = f \cdot R^{n-1}\psi_* \mathcal{O}_{\tilde{V}}$

(2) $R^{n-1}\psi_* \mathcal{O}_{\tilde{V}} / \mathcal{I} \cdot R^{n-1}\psi_* \mathcal{O}_{\tilde{V}} \cong R^{n-1}\psi_* (\mathcal{O}_{D(\mathcal{I}, \psi)}) \cong R^{n-1}\psi_* (\mathcal{O}_{\tilde{V}} / \mathcal{I})$

ただし, ψ^{-1} は $\psi^* \mathcal{I} \otimes_{\mathcal{O}_V} \mathcal{O}_{\tilde{V}} \rightarrow \mathcal{O}_{\tilde{V}}$ の image である。

証明 (1) 次の可換図式を見よ。

$$\begin{array}{ccccc}
 R^{n-1}\psi_* (\psi^* f) & \longrightarrow & R^{n-1}\psi_* (\mathcal{I} \mathcal{O}_{D(\mathcal{I}, \psi)}) & \longrightarrow & R^{n-1}\psi_* (\mathcal{I} \mathcal{O}_{\tilde{V}} / \psi^* f) \\
 & \searrow a & \downarrow b & & \parallel \\
 & & R^{n-1}\psi_* (\mathcal{O}_{\tilde{V}}) & & 0
 \end{array}$$

ここで, 消滅 c は, $n=1$ の時は $\mathcal{I} \mathcal{O}_{D(\mathcal{I}, \psi)} = \psi^* f$ であることにより, $n \geq 2$ の時は $\mathcal{I} \mathcal{O}_{D(\mathcal{I}, \psi)} / \psi^* f$ の ψ に対する相対次元が $n-2$ 以下であることによる。ゆえに $\text{Im } a = \text{Im } b$ である。そして, $\psi^* f$ を掛けることによつてできる同型

$\mathcal{O}_{\tilde{V}} \xrightarrow{\cong} (\psi^* f)_{\tilde{V}}$ が導く図式

$$\begin{array}{ccc}
 R^{n-1}\psi_* (\psi^* f) & \xrightarrow{a} & R^{n-1}\psi_* \mathcal{O}_{\tilde{V}} \\
 \uparrow \cong & & \nearrow f \text{ の 積} \\
 R^{n-1}\psi_* (\mathcal{O}_{\tilde{V}}) & &
 \end{array}$$

を見て, $\text{Im } a = f \cdot R^{n-1}\psi_* \mathcal{O}_{\tilde{V}}$ かわかる。更に, 図式

$$\begin{array}{ccc}
 R^{n-1} \psi_*(\psi^*(0)) & \xrightarrow{\quad} & R^{n-1} \psi_*(\mathcal{L}_D(\mathcal{L}_T)) \\
 \uparrow & \searrow \begin{matrix} \alpha \\ d \end{matrix} & \downarrow b \\
 \mathcal{L} \otimes R^{n-1} \psi_*(\mathcal{O}_V) & \xrightarrow[e]{\quad} & R^{n-1} \psi_*(\mathcal{O}_V) \\
 & \text{積} &
 \end{array}$$

を見て、関係

$\text{Im } b = \text{Im } a = f \cdot R^{n-1} \psi_*(\mathcal{O}_V) \subseteq \mathcal{L} \cdot R^{n-1} \psi_*(\mathcal{O}_V) = \text{Im } e \subseteq \text{Im } d \subseteq \text{Im } b$
 が得られ、これらが一致することがわかった。

(2) は $\text{coker } e = \text{coker } b = \text{coker } d$ であるから明らか。

証明終。

以後、この節では一次元特異点について考察する。

命題 (1.3) 一次元被約特異点 (V, p) について、次の等式が成立する。
 $\dim (\psi_* \mathcal{O}_V / \mathcal{O}_V) / \mathcal{M}_m (\psi_* \mathcal{O}_V / \mathcal{O}_V) = e(m, \mathcal{O}_V, p) - 1$ 。
 ただし、 $e(m, \mathcal{O}_V)$ は \mathcal{O}_V の m に関する重複度である。

証明 $\text{degree } D(m, \psi) = e(m, \mathcal{O}_V, p)$ であることは良く知られている。そして、定理 (1.2) により、これは $\dim (\psi_* \mathcal{O}_V / \mathcal{O}_V) / \mathcal{M}_m (\psi_* \mathcal{O}_V / \mathcal{O}_V)$ と一致する。与式の左辺 = $\dim (\psi_* \mathcal{O}_V / \mathcal{M}_m \psi_* \mathcal{O}_V + \mathcal{O}_V) = \dim (\psi_* \mathcal{O}_V / \mathcal{M}_m \psi_* \mathcal{O}_V) - \dim (\mathcal{M}_m \psi_* \mathcal{O}_V + \mathcal{O}_V / \mathcal{M}_m \psi_* \mathcal{O}_V) = e(m, \mathcal{O}_V, p) - \dim \mathcal{O}_V / \mathcal{M}_m \psi_* \mathcal{O}_V \cap \mathcal{O}_V$ である。 $\mathcal{M}_m \psi_* \mathcal{O}_V \cap \mathcal{O}_V = \mathcal{M}_m$ であることは容易にわかり、求める結果が従う。 証明終

(1.4) $\mathcal{O}_v/\mathfrak{m}^d$ の m -adic filtration について考えよ。数 $L(V, p) \in \frac{L(V, p) = \min\{d \in \mathbb{Z} \mid d \geq 0, m^d \cdot (\mathcal{O}_v/\mathfrak{m}^d) = 0\}}$ として定める。中山の補題により, $m^i (\mathcal{O}_v/\mathfrak{m}^i) \neq 0$ ならば $m^{i+1} (\mathcal{O}_v/\mathfrak{m}^{i+1}) \neq m^i (\mathcal{O}_v/\mathfrak{m}^{i+1})$ である。ゆえに数 $L(V, p)$ は filtration $\mathcal{O}_v/\mathfrak{m}^d \supseteq m (\mathcal{O}_v/\mathfrak{m}^d) \supseteq \dots \supseteq m^{L(V, p)} (\mathcal{O}_v/\mathfrak{m}^d) = 0$ の長さである。

$D(m, \psi) = D(f, \psi)$ とする元 $f \in \mathcal{M}$ をとると, 明らかに, $D(m^d, \psi) = D((f^d), \psi)$ for $d \geq 0$, であるから, 等号 $m^d \cdot (\mathcal{O}_v/\mathfrak{m}^d) = f^d \cdot (\mathcal{O}_v/\mathfrak{m}^d)$ $d \geq 0$ が成立する。上記 filtration は積による ψ zero endomorphism

$$f \cdot : \mathcal{O}_v/\mathfrak{m}^d \longrightarrow \mathcal{O}_v/\mathfrak{m}^d$$

によりきまる。 $f \cdot$ の固有空間の次元は $e(m, \mathcal{O}_v) - 1$ であり (1.3), nilpotency order は $L(V, p)$ である。ゆえに,

命題 (1.5) 一次元被約特異点 (V, p) において, 次の不等式が成立する。 $\dim(\mathcal{O}_v/\mathfrak{m}^d) \leq L(V, p)(e(m, \mathcal{O}_v) - 1)$
 $L(V, p) + e(m, \mathcal{O}_v) - 2 \leq \dim(\mathcal{O}_v/\mathfrak{m}^d)$.

(1.6). 上の filtration に関する 2つの特別な場合について, その言い換えに注意しておく。

$$(1) \quad L(V, p) = \dim(\Psi_* \mathcal{O}_V / \mathcal{O}_V) \Leftrightarrow e(m, \mathcal{O}_{V, p}) = 2.$$

(2) $L(V, p) = 1 \Leftrightarrow (V, p)$ は Cohen-Macaulay of maximal emb. dim である, かつ 1 回 m で blow up して normal になる。

証明についてひとこと. (1) は命題 (1.3) に含まれている。(2) については, 等式 $m \cdot (\Psi_* \mathcal{O}_V / \mathcal{O}_V) \cong m \cdot \Psi_* \mathcal{O}_V / m \cdot \mathcal{O}_V$ に気を付ければ, 伊藤 [5] に含まれている。

§ 2. 2次元正規特異点の numerical invariants について

(2.1) 2次元正規特異点 $(V, p) / \mathbb{C}$ とある resolution $\psi: (\tilde{V}, A) \rightarrow (V, p)$ を考えよ。 $R^i \Psi_* \mathcal{O}_V$ は resolution のとり方によらない \mathcal{O}_V -module であることが Leray の spectral sequence によって確かめることができる。そのことを念頭に置いて, 数 $L(V, p)$ を $L(V, p) = \min \{ d \in \mathbb{Z} \mid d \geq 0, m^d \cdot R^i \Psi_* \mathcal{O}_V = 0 \}$ と置く。(1.4) と言ったのと同様に, この数

$L(V, p)$ は m -adic filtration

$$R^i \Psi_* \mathcal{O}_V \supseteq m \cdot R^i \Psi_* \mathcal{O}_V \supseteq \dots \supseteq m^{L(V, p)} R^i \Psi_* \mathcal{O}_V = 0$$

の形である。

$D(m, \psi) = D(f, \psi)$ とする元 $f \in m$ をとると,
 $m^d \cdot R^i \Psi_* \mathcal{O}_V = f^d \cdot R^i \Psi_* \mathcal{O}_V \quad d \geq 0$ が成立し, 上記

filtration は積による巾 zero endomorphism

$$f: R'_{\mathbb{A}} \mathcal{O}_V \longrightarrow R'_{\mathbb{A}} \mathcal{O}_V$$

によりきまろ。 f の固有空間の次元は $\dim H^1(\mathcal{O}_{D(m,t)})$ であり (1.3), したがって, nilpotency order は $L(V,p)$ である。

ゆえに,

命題 (2.2) 2次元正規特異点 (V,p) の resolution $\psi:$

$(\tilde{V}, \mathcal{A}) \longrightarrow (V,p)$ について, 次の不等式が成立する。

$$\dim R'_{\mathbb{A}} \mathcal{O}_V \leq L(V,p) \cdot \dim H^1(\mathcal{O}_{D(m,t)}).$$

$$L(V,p) + \dim H^1(\mathcal{O}_{D(m,t)}) - 1 \leq \dim R'_{\mathbb{A}} \mathcal{O}_V \quad \parallel$$

$\dim R'_{\mathbb{A}} \mathcal{O}_V \in$ 幾何種数 (geometric genus) と呼ぶ $P_g(V,p)$ と書く。この節では, もうひとつ2次元独特の numerical invariant P_a をも加えて, $R'_{\mathbb{A}} \mathcal{O}_V$ の情報との関係を論じたい。 resolution $\psi: (\tilde{V}, \mathcal{A}) \longrightarrow (V,p)$ に対して数 $\sup \{ P_a(D) \mid \text{non-zero effective divisor } D \text{ on } \tilde{V}, \text{ s.t. } |D| \subset \mathcal{A} \}$ を考えよう。ただし, $P_a(D) := 1 - \chi(\mathcal{O}_D)$ とする。これは有限値であり, resolution のとり方に依るはいことがわかってゐる [12]。この数を特異点 (V,p) の 算術種数 (arithmetic genus) と呼ぶ $P_a(V,p)$ と書く。この数の“感じ”をわかっていただく為に, 次の補題を見て下さい。

補題 (2.3) 上の状況において, non-zero effective divisor D on \tilde{V} , s.t. $|D| \subset A$, に対して次の等式が成立する。

$$P_a(D) = \dim R^1 \mathcal{H}_x(O_{\tilde{V}}) - \dim R^1 \mathcal{H}_x(\mathcal{L}_D) - \dim \frac{m}{\mathcal{H}_x}(\mathcal{L}_D).$$

証明 $0 \rightarrow \mathcal{L}_D \rightarrow O_{\tilde{V}} \rightarrow O_D \rightarrow 0$ により, 完全列 $0 \rightarrow O_{\tilde{V}}/\mathcal{H}_x(\mathcal{L}_D) \rightarrow \mathcal{H}_x(O_D) \rightarrow R^1 \mathcal{H}_x(\mathcal{L}_D) \rightarrow R^1 \mathcal{H}_x(O_{\tilde{V}}) \rightarrow R^1 \mathcal{H}_x(O_D) \rightarrow 0$ が従う。この完全列により, 等式, $P_a(D) = 1 - \chi(O_D) = 1 - \dim \mathcal{H}_x(O_D) + \dim R^1 \mathcal{H}_x(O_D) = 1 + \dim R^1 \mathcal{H}_x(O_{\tilde{V}}) - \dim R^1 \mathcal{H}_x(\mathcal{L}_D) - \dim \frac{m}{\mathcal{H}_x}(\mathcal{L}_D)$ がわかる。 $1 = \dim O_{\tilde{V}/m}$ に気を付けてやれば, 主張が従う。 証終

これより, 特に $P_a(D) \leq P_g(V, p)$ であり, $P_a(V, p) \leq P_g(V, p)$ なのだが, 更に次の事が成立する。

命題 (2.4) 2次元正規特異点 (V, p) について, 次の不等式が成立する。

$$L(V, p) + P_a(V, p) - 1 \leq P_g(V, p).$$

証明 resolution $\psi: (\tilde{V}, A) \rightarrow (V, p)$ を考え, non-zero effective divisor D on \tilde{V} であって $|D| \subset A$ かつ $P_a(D) = P_a(V, p)$ となるものをとる。補題(2.3)により,

$\dim R^i \mathcal{F}_*(0) - P_2(V, p) = \dim R^i \mathcal{F}_*(d) + \dim \mathcal{M}_i^*(d)$ である。中山
 の補題を使て、 $\mathfrak{m}^{\dim R^i \mathcal{F}_*(d)} \cdot R^i \mathcal{F}_*(d) = 0$ と
 $\mathfrak{m}^{\dim(\mathcal{M}_i^*(d))} \cdot (\mathcal{M}_i^*(d)) = 0$ (すなわち $\mathfrak{m}^{\dim(\mathcal{M}_i^*(d))+1} \subseteq \mathcal{F}_*(d)$)
 がわかる。可換図式

$$\begin{array}{ccc}
 R^i \mathcal{F}_*(d) & \xrightarrow{g} & R^i \mathcal{F}_*(0) \\
 \uparrow & \searrow & \nearrow \text{精.} \\
 \mathcal{F}_*(d) \otimes R^i \mathcal{F}_*(0) & &
 \end{array}$$

を見て、次の関係が従う。 $\mathfrak{m}^{\dim R^i \mathcal{F}_*(d) + \dim(\mathcal{M}_i^*(d)) + 1} R^i \mathcal{F}_*(0) \subseteq \mathfrak{m}^{R^i \mathcal{F}_*(d)} \cdot \mathcal{F}_*(d) \cdot R^i \mathcal{F}_*(0) \subseteq g(\mathfrak{m}^{R^i \mathcal{F}_*(d)} \cdot R^i \mathcal{F}_*(d)) = 0$ 。
 ゆえに、 $1 + P_2(V, p) - P_2(V, p) = \dim R^i \mathcal{F}_*(d) + \dim \mathcal{M}_i^*(d) + 1 \geq L(V, p)$ である。 証終。

命題 (2.5) 2次元正規特異点 (V, p) について、 $P_2(V, p) = P_2(V, p)$ ならば、 $P_2(V, p) \equiv$ Cohen-Macaulay type である。

証明. $\psi: (D, A) \rightarrow (V, p)$ は resolution, $\omega_V \otimes \omega_D$
 $\in \mathbb{Z} \oplus \mathbb{Z} \oplus \mathbb{Z}$, V と D の dualizing sheaf とする。non-degenerate
 \mathbb{C} -bilinear pairing $\langle \cdot, \cdot \rangle: R^i \mathcal{F}_*(0) \times \omega_V / \mathcal{F}_*(\omega_V) \rightarrow \mathbb{C}$
 \in , 関係式 $\langle \alpha, \mathcal{F}_\beta \rangle = \langle \mathcal{F}_\alpha, \beta \rangle$ for $(\alpha, \beta, \mathcal{F}) \in R^i \mathcal{F}_*(0) \times \omega_V / \mathcal{F}_*(\omega_V) \times \mathcal{O}_V$ が成立するよりに、構成される (Some [9], Laufer [6])。ゆえに任意の ideal $\mathcal{I} \subseteq \mathcal{O}_V$

に対して, 次の duality が容易に確かめられる。

$$\{d \in R^1 \mathcal{O}_V \mid d \cdot \alpha = 0\} \xleftrightarrow{\text{dual}/\alpha} (W_V/\mathcal{O}_V(W_V)) / \mathcal{O}_V(W_V).$$

さて, $P_g(W_V) = P_a(V, p)$ ならば $m \cdot R^1 \mathcal{O}_V = 0$ である (2.4)。上の duality により, $P_g(V, p) = \dim R^1 \mathcal{O}_V = \dim (W_V/\mathcal{O}_V(W_V)) / \mathcal{O}_V(W_V) = \dim W_V/\mathcal{O}_V(W_V) + \mathcal{O}_V(W_V) \leq \dim W_V/\mathcal{O}_V(W_V) = \text{Cohen-Macaulay type}$. 証終

これは、命題 (1.3) [3], 定理 (2.16) [15], 定理 B [16], [7] などの研究の延長線上にある命題である。

例 (2.6) (渡辺敬一先生による) $P_g - P_a = \text{Cohen-Macaulay type}$ とするような例をあげておく。genus g の curve X 上の line bundle $[-d \cdot P] \rightarrow X$; P は X 上の一点, d は自然数, の zero-section をおぼして得られる特異点 (V, p) は $\text{Spec } R = V$, $R = \bigoplus_{k \geq 0} H^0(X, \mathcal{O}_X(kdP)) T^k$ と書くことができる ([8], [1], 参)。 R の canonical module K_R は [2], [13] により

$$K_R = \bigoplus_{k \in \mathbb{Z}} H^0(X, K_X \otimes \mathcal{O}_X(kdP)) T^k \text{ と書け,}$$

$P_g(V, p)$ は $P_g(V, p) = \sum_{k \geq 0} \dim H^1(\mathcal{O}_X(kdP))$ と書ける [8].

$$d \geq 2g + 1 \text{ ならば, } H^1(X, \mathcal{O}_X(mdP)) = 0 \quad m \geq 1,$$

$$H^0(X, K_X \otimes \mathcal{O}_X(mdP)) = 0 \quad m \leq -1, \text{ として,}$$

$H^0(X, K_X) \otimes H^0(X, \mathcal{O}_X(n\alpha_P)) \longrightarrow H^0(X, K_X \otimes \mathcal{O}_X(n\alpha_P))$ は 上射
for $n \geq 1$ である。ゆえに, この時, $P_g = P_a = \text{Cohen-}$
 $\text{Macaulay type} = \text{genus of } X$ である。

P_a はその定義により, resolution $\psi: (V, A) \rightarrow (V, p)$ に
おける例外集合 $A = \bigcup_{j=1}^m A_j$ の intersection matrix $(A_i \cdot A_j)$
によって決定できる数である。一方 P_g は $(A_i \cdot A_j)$ では決
まらない。だが, 特異点が good \mathbb{C}^* -action を持つ場合には,
 $R^i \psi_* \mathcal{O}_V$ の m -adic filtration が, 次の形で制限されることが
わかる。

定理 (2.7) (V, p) を 2次元正規特異点であって good
 \mathbb{C}^* -action を持つとする。この時, 任意の resolution $\psi: (V, A)$
 $\rightarrow (V, p)$ に対して, 次の不等式が成立する。

$$\dim \left(R^i \psi_* \mathcal{O}_V / \sum_{m \geq 1} R^i \psi_* \mathcal{O}_V \right) \leq P_a(V, p).$$

証明を述べる前に, すでに得られているこのノートの中の
結果と組みあわせて, 次の事が得られることに注意する。

good \mathbb{C}^* -action を持つ特異点について,

$$(1) \quad m R^i \psi_* \mathcal{O}_V = 0 \iff P_a(V, p) = P_g(V, p)$$

$$(2) \quad P_a(V, p) = 0 \iff P_g(V, p) = 0.$$

$$(3) \quad P_a(V, p) = 1 \iff \dim R'_{\mathbb{C}} \otimes_{\mathbb{C}} \mathcal{O}_{\mathbb{C}} / \mathfrak{m} \cdot R'_{\mathbb{C}} \otimes_{\mathbb{C}} \mathcal{O}_{\mathbb{C}} = 1$$

$$\iff L(V, p) = P_s(V, p) \text{ かつ } P_s \neq 0.$$

ただし, (2) は \mathbb{C}^* -action の条件なしで, すてに M. Artin によって証明されている。

筆者には, "上の m -adic filtration と P_a の直接対応" は興味深い事に思える。そして, \mathbb{C}^* -action の存在の仮定しない場合に 定理が成立するかどうかは, 次に解くべき本質的な問題である。

定理 (2.7) の証明の概略. 次の命題を証明抜まで使おう。

命題 (2.8) 2次元正規特異点 (V, p) と 非自明な partial resolution $\psi: (V, A) \rightarrow (V, p)$ であって, \tilde{V} が高々有理特異点しか持たないものを考えよ。この時,

- (1) $P_a(V, p) = \max \left\{ 1 - \chi(\mathcal{O}_{\tilde{V}}/I) \mid \begin{array}{l} I: \text{coherent ideal sheaf of } \mathcal{O}_{\tilde{V}} \\ \text{s.t. } I \neq \mathcal{O}_{\tilde{V}}, \text{supp}(\mathcal{O}_{\tilde{V}}/I) \subseteq A \end{array} \right\}$
- (2) 更に, 右辺の I として divisorial なものに制限しても等号が成立する。

さて, 我々は \mathbb{C}^* -action を特異点の一般論 ([1], [8], [13] [14]) により, curve X とその上の \mathbb{Q} -Weil divisor D を

用いて, $R = \bigoplus_{k \geq 0} H^0(X, \mathcal{O}_X(L^k D)) T^k$, $\text{Spec } R = V$,

とあらわす。更に, partial resolution ψ を

$$\tilde{V} = \text{Spec} \left(\bigoplus_{k \geq 0} \mathcal{O}_X(L^k D) \right) T^k \xrightarrow{\psi} \text{Spec } R$$

\cup
 X

として構成する。ここで, $|\psi^{-1}(p)| = X$ であり, \tilde{V} は cyclic quotient singularity (特に rational singularity) を持つのみである。 $D(m, \psi) = r_m \cdot X$, $r_m \in \mathbb{N}$ と書くと,

$$\mathcal{O}_{\tilde{V}}(-r_m X) = \bigoplus_{k \geq r_m} \mathcal{O}_X(L^k D) T^k \text{ が成立する (}$$

Remark (1.5) (ii) [14])。そこで, 次の完全列を見よ。

$$0 \rightarrow \psi_* (\mathcal{O}_{\tilde{V}}(-r_m X)) \rightarrow \psi_* (\mathcal{O}_{\tilde{V}}) \rightarrow \psi_* (\mathcal{O}_{D(m, \psi)})$$

\parallel \parallel
 m \mathcal{O}_V

$$\rightarrow R^1 \psi_* (\mathcal{O}_{\tilde{V}}(-r_m X)) \xrightarrow{h} R^1 \psi_* (\mathcal{O}_{\tilde{V}}) \rightarrow R^1 \psi_* (\mathcal{O}_{D(m, \psi)}) \rightarrow 0$$

$$\bigoplus_{k \geq r_m} H^1(X, \mathcal{O}_X(L^k D)) \rightarrow \bigoplus_{k \geq 0} H^1(X, \mathcal{O}_X(L^k D))$$

これより, h は単射であり, $\psi_* (\mathcal{O}_{D(m, \psi)}) \cong \mathbb{C}$ である。

ゆえに, $p_a(V|_p) \geq 1 - \chi(\mathcal{O}_{D(m, \psi)}) = \dim H^1(\mathcal{O}_{D(m, \psi)})$

$$= R^1 \psi_* \mathcal{O}_{\tilde{V}} / m \cdot R^1 \psi_* (\mathcal{O}_{\tilde{V}}) \text{ である。 } \psi': (V', A') \rightarrow (V, p)$$

を任意の resolution とすると, $R^1 \psi_* (\mathcal{O}_{V'}) = R^1 \psi_* \mathcal{O}_{\tilde{V}}$ であることは標準的な議論で従う。

証明終

参考文献.

- [1] M. Demazure : Anneaux gradués normaux, preprint.
- [2] S. Goto, Kei-i. Watanabe : On graded rings I, J. Math. Soc. Japan vol. 30., 179 — 213 (1978).
- [3] F. Hidaka, Kei-i. Watanabe : Normal Gorenstein surfaces with ample anti-canonical divisor, Tokyo J. Math. 4., 319 — 330 (1981).
- [4] 樋口, 吉永, 渡辺 (公) : 多変数複素解析入門, 森北出版株式会社, 1980.
- [5] S. Itho : Analytically unramified local ring について, 可換環論シンポジウム報告集(第5回) 71-76 (1984).
- [6] H. B. Laufer : On rational singularities. Amer. J. Math., 94. (1972) 597 — 608.
- [7] S. Ohyama, E. Yoshinaga : A criterion for 2-dimensional normal singularities to be weakly elliptic. Science rep. of Yokohama National Univ. ser II, vol 26, 5-7 (1979).
- [8] H. Pinkham : Normal surface singularities with \mathbb{C}^* -action. Math. Ann. 227, 183 — 193 (1977).
- [9] J. P. Serre : Un théorème de dualité. Comm.

Math. Helv. 29, 9-26 (1955).

- [10] M. Tomari : A β_3 -formula and elliptic singularities.
preprint. R.I.M.S. No 458.
- [11] _____ : 幾何種数の計算公式と楕円型特異点について (総合報告, その他), 1984年3月. 数理研シンポジウム "多様体の特異点の最近の成果" 講究録.
- [12] P. Waagnerich : Elliptic singularities of surfaces, Amer. J. Math. 92., 419-454 (1970).
- [13] Kei-ichi Watanabe : Some remarks concerning Demazure's construction of normal graded rings. Nagoya. Math. J vol 83 (1981) 203-211.
- [14] _____ : Rational singularities with k^* -action in "Commutative algebra" Proc. Trento Conf. edited by S. Greco and G. Valla. 339-351. Lecture Note. Pure and applied Math. No 84 (1983). Marcel Dekker.
- [15] Kimio Watanabe : On plurigenera of normal isolated singularities I. Math. Ann. 250, 65-94 (1980).
- [16] S.S.-T. Yau : On maximally elliptic singularities Trans. A.M.S. 257, 269-329 (1980).